津高同窓会報

発行所
津市新町3丁目1－1
津高等学校
同窓会事務局

夏より赫き友愛のつどい

昭和46年度総会の記録

四十六年度津高同窓会総会は、恒例により八月第一日曜たる一日午前十時半より津高第一体育館において挙行された。つどえる会員約三百名、例年に較べ決して多いといえる数ではなく、且つまた若い世代の参加が相変ら予少なかったのは残念であったが、つどえる者は諸共に友情の灯を赫くべく始しき様を誓いながら、議事、歓談に合唱に終始なごやかに時を移し、まこと意義あるつどいではあった。

この日も曇りこのごろとはいえ昨年同様まことに快晴、明るい夏空、燦たる陽は、この大いなるわれらがつどいを祝するかのよう。

定刻開会、司会者は岸川博次教諭。まず阿部副会長の号令にて一同亡恩藤田前会長の御霊に黙禱を捧げ、そのあと直ちに吉田重雄氏（T6卒）を議長に選出。次いで阿部副会長よりの事業報告に入るも、この中では特に東京、大阪、京都、名古屋、松阪各支部の状況本年潮類を遡ぼることにしたいきさつ、三重校の土地問題、若い年令層の総会への出席等に関し、詳細な説明や要望などがあった。続いて会計監査報告、事業計画、予算と議事はスムースに進行。次には会則変更の議事、別掲のごとくに会則を改正。そのあと役員の選出に入り、別掲のごとく大喜治郎会長（T13卒）を始めとする新役員を決定。次には新会長の挨拶この中で特に新会長は、各地区会長が本部とのパイプを通すことなど強調された。

かくて十一時二十分、ここに議事はすべて終了。それからは十一時五十分まで約半時間の間、素晴らしい郷土芸能（入江和歌囃子）「八幡太鼓」「八幡獅子」をしゆくまで堪賞。さて、そのあとは寿司、サンドウイッチなど頂戴しながら、老いたる者も健児や乙女の昔に戻り尽きぬ思いのよもやま話。友愛の熱気館内に満つ。

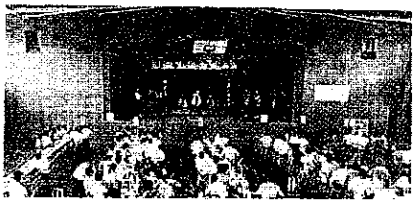
かくて最後は例により懐かしの旧制津中、津高女および津高の校歌、応援歌などを高らかに合唱わざわざ大阪より老驥ひっさげ駆けつけられた明治四十五年卒業の和田大先輩の音頭にて万才三唱の上、閉会となる。固辞辞退に後日の再会を約する者、さらば二次会をと張切る者、熱き思いの人波揺れて一時に十一時四十五分。

（付記）

四十六年度の総会は、校内での潤類の全廃をはじめ、いろんな面で従来とはかなり変った様子で実施しました。ところで、この総会の実施内容等が決定されるまでには、その数カ月も前から幾回となく常任幹事会、年度幹事会や実行委員会などがもたれ、その都度真剣な論議や過去へのいろんな度省等がなされたのでした。ともあれ有意義にして且つ魅力ある総会を何より念願いたしますので、これが計画等につきご意見あらば、どしどし本部事務局（仙せ出られますよう、お願いいたします。

なお、本年も若い世代のご参加がきわめて少ないようでしたが、次の機会には是非共ご参加者数を出席くださるよう切望します。

最後に、総会当日アンケートをお出し戴き、本当に有難うございました。これは今後の総運営に充分活かさせて戴きたく存じております。



豪華なアトラクション風景

役員一覧

会　長　大藪　治郎（T13）
副会長　阿部喜三郎（S4）
　　辻　亮一（S10）
　　竹鼎　とよ（M43）
　　松島恭二八（S23）
　　島羽　登（S29）
会　計　米本　宏（S4）
会計監査　吉川　正一（S2）
　　松岡　晃（S18）
　　三宅　克也（S23）
　　山路　きよ（S11）

就任のご挨拶

同窓会長　大藪　治郎（T13）

昭和四十六年八月一日、津高同窓会総会において選出され会長の重責を担うことになりました。

想えば明治三十三年創立の津中、明治三十四年創立の津高女、この古い歴史をもつ両校が昭和二十三年、学制改革により一つとなり新しく津高校として誕生したのであります。この辺の消息を一層強く出で来る、古き流れの　ここに合い　又新しき　流れなり　吾等の歴史　かがやけり」と山口誓子先生は、いみじくも詠い給ておられます。

一応学校は一つになりましたが同窓会は依然として、陳川三重校の合同に関しては陳川側の代表として努力され三者合同なるや推き津高と独自の運営を続けること十年余、漸く昭和三十四年に津高同窓会の名のもとに大同団結し、全国に誇る大世帯となり今日に及んでおります。

それにつけても今は亡き前会長藤田さんのことを想い出さずにはいられません、藤田さんは同窓会の合同に際して陳川側の代表として努力され三者合同なるや推き上、皆様方の御指導と御協力により自らも赤駒馬に乗りつつ同窓会の為に最善を尽す存念で御座いますから何卒宜しく御願い申上げます。

尚、昨四十六年九月二十六日に京都同窓会、同十一月十四日に大阪同窓会、同十二月二十七日に東京同窓会と夫々年次総会に御招きを受け出席致しました。（詳細は支部だよりに譲る省略）

京都では会長改選で中村信之氏が会長として留任、出席者七十名中男女各三十五名と全て同教という仲のよさと幹事小谷正次郎氏が野球部の後輩で、かつて甲子園に出場した諸君を縦横に駆使して会の円滑な運営に当られ又出場した時のキャプテン近藤好智君が実に見事な司会ぶりを見せてくれたことも、球部の後援会長であった私にとり言い知れぬ喜びでした。

東京では生徒任実恵氏が新会長に前会長浅生信一氏が顧問に就任されました。九十余歳の和波雅一氏の御元気な和服姿に接し大喜び当時を想い感無量、唯惜しむらくは女性と特に若い世代の人達の出席が少なかった事であり、これは今後の課題として御一考願いたいと存じます。

各地区共に案外の御歓待と御配意を頂きまして厚く御礼の祇園を借り心から御礼を申し上げます。

鬼にも角にも一度御引受した以なき手つきなら印象深いものでしょう。

大阪では、野田恵吉氏が会長として留任、出席者七十名中男女各三十五名と全て同教という仲のよさと幹事小谷正次郎氏が野球部の後輩で、かつて甲子園に出場した諸君を縦横に駆使して会の円滑な運営に当られ又出場した時のキャプテン近藤好智君が実に見事な司会ぶりを見せてくれたことも、球部の後援会長であった私にとり言い知れぬ喜びでした。

東京では生徒任実恵氏が新会長に前会長浅生信一氏が顧問に就任されましたが御一人とも「ヤア！　イヨオ！」と肩を叩けば挨拶になる竹馬の友で嬉しさも一入でした。出席者も男子十二名、女子十六名と女性の方が多かった事と昭和六年卒の小西弘氏夫人郷子さん（昭和十七年卒）より出席者全員がペーパーフラワー造りの御指導を受けましたが男性側の、いとおぼつかから御親兼助氏、バトンが渡されましたが御一人とも「ヤア！　イヨオ！」と肩を叩けば挨拶になる竹馬の友で嬉しさも一入でした。出席者も男子十二名、女子十六名と女性の方が多かった事と昭和六年卒の小西弘氏夫人郷子さん（昭和十七年卒）より出席者全員がペーパーフラワー造りの御指導を受けましたが男性側の、いとおぼつか

三重県立津高等学校同窓会会則

（名　称）

第1条　本会は、三重県立津高等学校同窓会と称する。

（事務局）

第2条　本会の事務局は、三重県立津高等学校内におく。

（会　員）

第3条　本会は、次の会員をもって構成する。

1、正会員　三重県立津中学校、三重県立津高等女学校、三重県立津高等学校の卒業生および上記の三校に在学したもので本会を希望するもの。

2、特別会員　上記の三校に在職した教職員

（目　的）

第4条　本会は、会員相互の連絡をはかり親睦をあつくすることを目的とする。

（事　業）

第5条　本会は、前条の目的達成のため会員名簿および会誌を発行し、その他必要な事業をおこなう。

（役員および顧問、参与）

第6条　本会に次の役員を置き、顧問、参与をおくことができる。

会長1名　副会長6名　常任幹事若干名　年度幹事若干名
会計1名　会計監査4名
顧問　校長および元会長
参与　各地区同窓会長

1、会長は、本会を代表し会務を総括する。

2、副会長は、会長を補佐し、会長不在のときはこれを代行する。

3、常任幹事は、本会の運営にあたる。

4、年度幹事は、本会の連絡にあたり、その年度を代表する。

5、会計は、本会の会計をつかさどる。

6、会計監査は、本会の会計を監査する。

7、顧問および参与は会長の相談に応ずる。

（役員の選出）

第7条　1、会長、副会長、会計および会計監査は、総会で選出する。

2、常任幹事は、年度幹事から会長が指名し、総会の承認をうる。

3、年度幹事は、各クラス会から選出する。

（役員の任期）

第8条　役員の任期は2年とする。但し重任は妨げない。

（機　関）

第9条　本会に次の機関を設ける。

1、総会　年1回　2、常任幹事会　年数回　3、年度幹事会　年数回

総会、常任幹事会、年度幹事会は、会長がこれを招集する。

（事務局）

第10条　本会の業務の円滑化をはかるため事務局を設ける。

事務局には、書記をおくことができる。

書記の任免は、常任幹事会の承認をうけて会長がこれをおこなう。

（会　計）

第11条　本会の会計年度は、毎年6月1日より翌年5月31日までとする。

本会運営に関する経費は、入会金、会費の納入する、終身会費（1口、1,500円）または、年度会費（毎年100円）寄附金その他をもってこれにあてる。

正会員は、入会に際し入会金として1,080円を納入する。

（支　部）

第12条　本会に支部をおくことができる。

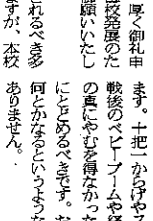
（附　則）

1、本会会則は、昭和46年8月1日からこれを施行する。

2、本会の会則は総会において出席会員の過半数の賛同により改正することができる。

ご挨拶

津高等学校長　小竹　惟



御無沙汰しています。いつもながら同窓会にはお世話になっています。二五、〇〇〇人の会員を擁する力強い同窓会がいつも母校を見守っていていただくことは誠にありがたいことです。厚く御礼申し上げます。今後も母校発展のため御指導、御鞭撻を御願いいたします。

現在の高校は検討されるべき多くの問題を持っていますが、本校にとってはマンモス化解消の問題があります。これは本県高校全体の問題でもあります。

要するに、教育は、人と人とのはたらきかけですから、一人の教員で受持つ生徒数及び一校の収容生徒数には限りがあるのは当然です。本校の生徒数は現在約一、七〇〇人ですが、私はこれは一校の適正な生徒数の二倍だと考えています。十把一からげやスシズメは戦後のベビーブームや経済力貧困の真にやむを得なかった時期だけにとどめるべきです。おどしでは何とかなるというようなものではありません。

学力、素行、生活態度などに見られる現在の高校生のいろいろな傾向が、形式的マンモス集団教育の影響ではないとは誰も言い切れないでしょう。

本校においても、一日も早くマンモスを解消することが、教育効果をあげる早道だと確信しています。

昭和四十六年三月の卒業生の進路状況は、七〇％が進学、二四％が進学待ち、五％が就職で、前年までに較べて進学待ちが減少しました。着実に成績はのびているとはいうものの、まだまだ努力の余地があるように思います。

先輩諸氏の母校に対する絶大なる御力添えを今後ともよろしく御願い申し上げます。

藤田前会長の霊よ安かれ

在りし日の藤田前会長

既に前号でお報らせ申し上げましたように、長年母校のため、また同窓会のため尊い心と力を賜わりました藤田広前同窓会長は、昨年一月二十二日、突如として遠去られました。月日の脚は速いもので、もうあれから既に一年を経過いたしました。ここに前会長のご遺徳、ご功績を衷心より讃えまつりますと共に、そのご冥福をいかばかり祈り申し上げる次第でございます。前号では小竹校長による前会長を悼みまつる文を掲載させて戴きましたが、今回は特に前会長と同期の宮本清一氏（陸士ご卒業）にお願い申し上げ、次のように、前会長を偲ぶ文をものして戴きました。宮本氏のご厚情に対しとこに謹んで厚く謝意を奉る次第でございます。

故 藤田広君を憶う

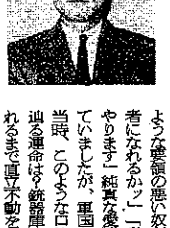
（T3）宮本清一

私は故藤田広君と同じ大正二年の卒業生であります。彼の御望や幾度に戴きましては、既に古界の有識者から余り聞なく称えられ、又これからも語られることと思いますので、私は私のみが知り、私のみが書き得る私の思い出を綴って彼を偲びたいと思います。

私共が中学で机をならべていた当時は、彼は藤田広君ではなく、堀江角三と言う名前でした。それでその愛称は「堀江の角サン」であり、ニックネームは角三をひっくりかえして「三角」と言って親しまれていました。特別目立った存在ではありませんでしたが、福岡県で人と言い争ったり、喧嘩をする様な事は絶対にしない謙温厚な真面目な人柄で、後年彼が世に出て、発揮を一身に集めるに至った円熟した人格の萌芽は、既にその頃からあった様に思います。

中学を卒業してから終戦に、御互に歩む道が違っていましたので、彼と顔を合すことは絶えてなかったのですが、唯一回偶然に、真に偶然に南京で巡り合ったことが、今でもはっきりと眼前に彷彿として浮びます。近年彼とは年に二、三回公的な会合で顔を合せましたが、彼と会う毎に彼は同時も必ず其時のことを話しました。彼と私との交遊の楔となったのは、実にこの思い出にあります。それで私はその思い出を書いて彼を偲ぶことに致しました。

それは昭和十三年六月始め頃のことでした。私は「歩兵長隊」で有名な北部の中原の麦畑を、中支方面から北進して徐州会戦に参加し、私の師団は徐州一番乗りの栄誉輝き、意気揚々として再び中支戦線に復帰して間もない時のことでした。私は戦務を帯びて第一線から南京へ参りました。そして堀江を過って南京の塩頭に第一歩を踏み入れた時でした。誰かが私を呼ぶ者があります。「宮本君で



昭和十一年から四年間、寒多い十代を母校で、寄宿舎で、敬愛する先輩や秀れた友人に囲まれて送ることのできた母校への感慕は、津中から津高へと名称は変わり、建物は新しくなっても少しも変わることなく続いています。同窓会から、原稿の依頼を受け、会員の一人として、いささかの責務でも果させていただき母校の若い後輩に何かの役にでもたつことがあれば幸いと思い、筆をとった次第です。

中学四年の時、何かの手違いで軍事教練の教官（グラス全員の前で叱責されました。「お前のような奴は将来何になるつもりか？」「医学をやります。陸士海兵には参りません」「馬鹿野郎！お前のめていました。が思い出ません。当時私は中佐参謀であり、彼は若集された確かな予備の中尉であったと思います。帽子をかぶっていましたので頭が禿げているとはわかりませんが、私と同年配です。馴れ馴れしく話しかけて来た様子から、或は士官学校を出て早々の若い頃のことではなかろうかと、色々思いめぐらしてみましたがわかりません。私の頭はコンピューターの様に探し求めたことでしたが思い出せません。私が思い出そうと苦心しているのがわかったと見えて、「藤田だよ」と、それでも私はまだわかりません。わからないのが当り前です。藤田と姓が変ったことを私は知らないのですから「堀江だよ。堀江角三だよ」と聞かされて、ああそうだったか、なるほどそうだ、と始めて思い出した様なことでした。姓を分って二十年あまり、絶えて交遊のなかった私を、よくぞ見つけてくれたと感激し喜びました。そして其反面私の愚鈍さを恥じ入ったことでした。

この思いがけない邂逅に二人がどんなに喜び、どんな冷好をしたか御想像に委せます。周囲にいる彼の部下達は呆然にとられ眺めていた様です。私は前後三年支那の戦地で勤務しましたが、故郷の知己に出合ったのは此時唯一回だけです。しかも五年間机をならべた学友に巡り合うとは、何と言う好運であり、何と言う喜びでありましょう。若し一分でも時間がズレていれば会えなかったのです。奇蹟であり、神のお引き合せと思うのも無理はないでしょう。其時の感激と喜びとは到底私の拙い文章では書き表わすことは出来ません。

彼は野戦電信隊長として、徐州会戦後の、津浦線に沿って軍用電線を敷設しつつ南下して、南京郊外に着いたばかりの頃、私は前にも申した通り戦線を終って、南京の軍司令部を訪ねる途中だったのです。共に重大な任務を成し遂げた直後の、満ち足りた充実した気持ちでしたから、その喜びも一入強く大きかったと思います。この様な場合、何はともあれ先ず一杯と言う事になるのですが、南京郊外とは言え激戦ながら荒廃した戦地です。喜びを共にすたか御想像に委せます。周囲にいる彼の部下達は呆然にとられ眺めていた様です。私は前後三年支那の戦地で勤務しましたが、故郷の知己に出合ったのは此時唯一回だけです。しかも五年間机をならべた学友に巡り合うとは、何と言う好運であり、何と言う喜びでありましょう。若し一分でも時間がズレていれば会えなかったのです。奇蹟であり、神のお引き合せと思うのも無理はないでしょう。其時の感激と喜びとは到底私の拙い文章では書き表わすことは出来ません。

彼は野戦電信隊長として、徐州会戦後の、津浦線に沿って軍用電線を敷設しつつ南下して、南京郊外に着いたばかりの頃、私は前にも申した通り戦線を終って、南京の軍司令部を訪ねる途中だったのです。共に重大な任務を成し遂げた直後の、満ち足りた充実した気持ちでしたから、その喜びも一入強く大きかったと思います。この様な場合、何はともあれ先ず一杯と言う事になるのですが、南京郊外とは言え激戦ながら荒廃した戦地です。喜びを共にすに私の両親は今なお健康で診療に張り切っております。

私の専門であるがんの免疫学の分野で、ノーベル賞審査委員であるヨーテボルグ教授が、ストックホルムの王立カロリンスカ研究所のがん生物学部を主宰しています。彼の研究所は、世界の俊秀を集めて最新をわかたぬ研究が進められる。

医学を志す人々に

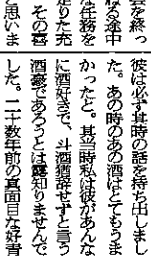
東京大学医科学研究所教授
国立がんセンター研究所　ウイルス部長
（S17）西岡久寿彌

ような要領の悪い奴がマトモな医者になれるかッ！」「私は細菌学をやります」純真な愛国心には燃えていましたが、軍国主義軍人かな当時、このような口答をした者の迫る運命は？銃器庫の前で日の暮れるまで直立不動をさせられ、軍事教練のバッドマークは、以後、高校、大学で終戦を迎えるまでついてまわりました。

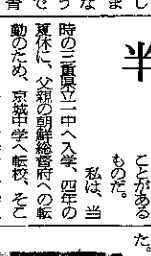
世代は変わり、私の娘も二度その年になりました。将来の方針を真剣に考えるこの頃、私はこの一文を彼と同じ年頃の母校の雰囲気との対話のつもりで進めます。

―医学とは何でしょうか。

―自己否定の学問の一語につきると思います。最善の努力をつくして、自分の存在を無にしてしまうことです。私の心には、深夜、疲れ切った身体で、ある時は風邪なんかをおして、三里四里の道を自転車でかけ回り、漁船に乗って往診し、「薬よりもお米が」と農家の家族に米を与えていた父の姿が眼に焼きついています。幸いに



ています。このビルの傍らうそうとして樹ちに囲まれ苔むした城跡があります。これは何かと尋ねたら、昔ノウェーデン人が、ロシア人の侵攻を恐れて築いた城の遺跡がそうです。ロシアとスウェーデンが平和な現在、いかにこの城跡が敵を防ぐ目的の為には無意味であるかと感じているうちに



一刻も早く、がんと戦っている研究所の建物が、がんが支配された時には、如何に無意義なものと化してしまうでしょうか。一刻も早く我々にはそうなるように努力しなければならないというのが我々の会話でした。私ものがんセンターもたった今、十一階建の新しい病院が新築中で、研究室に

も車中の地響きがしてきます。

がんを克服した時には、万里の長城等々、大革命のものと思いながら一日も早くその日の来ることを念じて顕微鏡を覗き、論文を書いているのが彼等の父の姿です。

私ども東大の伝統ある伝染病研究所はついに医科学研究所と名称を変えざるを得なくなりました。癌の治療を志して胸部外科に入った俊秀のクラスメートは治療の対象を変えなければならなくなったという殷遇からさまるものを持っております。

自己否定するということは、自分として最善の努力をつくして自分を滅ずることであり、東洋倫理の根幹をなしているものと思います。伝染病研究所で、コレラの発生の警報が出ますと、日夜をわかたぬワクチン製造作業が続けられました。できあがって待機していたワクチンが、コレラが水際作戦で防止されたとなるとワクチン系がつけられ、病原ウイルスは発見され、免疫は存在するとの結論は出ています。ヒトのがんについても資本主義化されてしまった現代社会の問題については、神の摂理の中に位置付けられた結果を我々の科学的方法論で解析する以外方法はありません。この分野でも、伊藤淳平先輩と、東西のがんセンター研究所を矣々拠点に、

Competition と Cooperation

が展開しています。その為には、若い俊秀のエネルギーと叡智を無限に要求しているのが現状であり諸者の活躍分野は無限です。何時人のがんが克服されるか予言することは不可能で明日であるか十年先であるかはまったくわかりません。その時は我々の職務は終ります。しかし病人との根本的な闘いは人類の存続する限り地球上を通じて自己否定を繰り返しながら展開されて行かなければなりません。

陳川同窓の若い俊秀が、高柄正眞、長野泰一、伊藤淳平大先輩が活躍しているこの分野に一人でも多く進まれることを念じつつ筆を置きます。

半世紀の歩み

（T9）村上義威

これは誰でもがよく経験し、ロマンであるが、人間一生の歩みの中で思いもかけぬことからその歩みに決定的な方向づけをされてしまうことがあるものだ。

私は、当時の三重県立二中へ入学、四年の夏休に、父親の朝鮮総督府への転勤のため、京城中学へ転校、そこを卒業した。大正九年（一九二〇）であった。

京城には、上級学校としては、当時、工業専門学校と医学専門学校があったが、学生の多くは、殆んどが内地を憧れて海を渡って行った。

私も同様、内地を望んだ。しかし東京でなく、比較的近いことと、当時盛んになりつつあった工業熱と、且つ、入試問題が自分に向いていることから、熊本高工を受験したものの落第してしまった。次の年は、一校だけでなく、新設の広島高工と、軍医にでもなるべく、と、都合三校へ願書を出した。

ところが、その熊本へ行く途中の汽車の中で、偶り合わせた中年のおばさんの話に、その人の家族が、京城医専出の医者にかかってひどい目に合い、もうとりとりだなという話を聞いて、その医専へ願書を出していた私は少々考えさせられてしまった。

そして、ともかく熊本を受け、次の広島の受験と京城とは、日程が重なることになり、どちらか棄捨しなければならなくなった。

その車中で聞いた話から、医専の受験に決心がぐらついていた私はもうとう棄権、広島を受けた。

ところが、実力がついていなかったのか、熊本も広島も落第、京城の方は受験してないのだからどうにもならず、止むなく父のすすめで、当時授業料もいらなかった京城医専へ入学した。

結局、私は実習補習学校・水産学校の教員、水産試験場の技術者として、位階はかより上級でも薄給の地方公務員の生活を長い間続けた。しかし、貧しくはあったが、生物学を相手の仕事は自分の性に合い、いやだと思ったことはなかった。

そうした生活の積み重ねの後、私は姿を戸在の岩手県水試の場長の地位についた。そして、誰に憚かることもなく、物を育てるのが好きな魚のすりの性分を活かして、廃ん水産関係その他の雑誌に水産物学一冊の随筆を寄稿し続けた。やがて十年勤務の後、参議院の調査室に転じ、ここでも十年。最後に、漁業組合学校の学監として就任、漁村子弟の教育に専念。その間、昭和42年に「魚百景記」と題して、それ迄に書きためたものを纏めて出版した。

続いて45年に「味覚風土記」を世に送り、自分の著作を後世に遺す事ができてつくづく味わうことが出来た。

医者になりそこねた私は、水産の道一筋を歩んで来た。悔いなき半世紀の坂みであった。拙句を一つ。

・志は常に持ちたし菊の寒

本学部獣医学部（現東京水大）を福岡で受験、幸いにも合格した。そして、生産の場を水産で生きることに運命づけられてしまったのだ。

もし車中で、あの人に出会わなかったら、私は医者になり、当時朝鮮でしか開業できない医師だったかも？朝鮮で暮し、太平洋戦争で引き揚げて来なければならない運命となったかも知れない。

さて、私は水産を卒業、青森県八戸の水産学校で教員をしていた頃当時京中同級生で、医専へ入った四、五名の中、次々と医専の学位をとったという話に、少からぬ感動を受けるとともに、私は焦りを感じた。

私も成績のずっと下だった連中が、より安い医専とはいえ、ともかくも博士様になったのかと、願書を出しておきながら受けに行かなかったことを悔びるような気にさえなるのだった。

母校の歴史（六）

運動部の誕生(1)

真弓六一（S17）

津中の巻

本校における運動部の発祥は、遠く明治十八年十一月着任の第三代校長・津田純一当時にさかのぼる。すなわち、明治十九年六月、津田校長が招聘した外人教師のアメリカ人E・G・ストーラにより野球競技の萌芽を植えつけられたことに端を発したのである。このストーラがボールとバットを携供して、生徒にベースボールゲームの方法を教えたことから生徒間に野球熱が強くなった。津田校長も米国法律学士の資格をもつ、米国カナーバ大学卒業であり、進歩的な教育方針をとっていたから、生徒の興味も当然運動方面に高まった。また、津田校長自身も岩田川でボートの練習を奨めたり、クリケットなども教えて校様で、当時としては珍しい種々の運動種目導入に力を注いでいた。

以上のように津田校長は、その自由主義的な教育方針とも相まって、運動競技を本校に芽吹させたのであったが、明治二十二年一月「四州学館事件」で退任すると、代って就任した第四代校長の満水誠吉は、校規の厳正の意味からも従来の方針を一掃し、武道につとめることになった。そのうえ校内にはそのころ学校騒動がありまた、第五代校長、山崎言蔵時代も学園は終息せず、むしろ頻発する状態であったから、到底運動競技が津田時代に復し、活発になる雰囲気ではなかった。

ところで、第六代校長として明治二十九年十二月着任した久田宮は、このような状況を憂えていたが、何がしも校内騒動の余波もあり、加えて在任が十カ月という短期であったから、その経綸を果すことはできなかった。

さて、第七代校長に秋山正義が着任すると、先徳の教育ぼうの自発性にまつほかなしとの考え方から、自由放任主義をもいわれる方針でのぞんだため、校内はまた想以上に自由闊達の気がみなぎり、運動方面も俄然活気が溢れ始めた。

そのような開放期の生徒気風の一端は、つぎの一文によって鮮やかに写しだされている。

「多感なるは詩神なる哉、美妙なる宇宙なる哉、茫々たる蒼空、目月星辰懸り、渺々たる大海、河嶽林連る。春には紅花鶯月あり夏には暗砌蛍火あり、秋は銀月の皎々たるあり、冬には雪花の繽紛たるあり、仰ぎては巍々たる高嶽を天辺に眺め、伏しては落々たる河海を地上に見る。或は雨となり、風となり、雷となり、火となり、何れ造化の美妙を尽して其の秘密を洩さざるなし、是れ抑も何の故ぞ、詩人墨客の腸を記さんためか、雲師月客の閑暇に資せんためか、否々奇人は知る、曰く一層大なる目的のために造られたるを。知らずや蒼天を摩す既の青年が元気を鼓舞せんためなるを」

このようにして運動競技が盛んになり、それが部活動的な形を整えてきたのであって、現存する資料からでも、当時の記録にこの頃から撃剣、柔道部大会、春季大運動会、秋季大競漕会、運動部改選、四月市陸校野球試合などと運動部活動の文字が頻繁に現われてくる。

さて、本稿では運動部の華、ボート部が如何にして誕生したのか経緯から述べることとする。

日本におけるボートの草分けはなんといっても海軍と在留外人が最初で、明治維新前すでに海軍ではボートを漕ぎ始めていた。ボート競漕の嚆矢は、明治十七年十月東京大学が向島言問付近で実施したのが始まりで、その中学のボートでは開成中学が盛んになり、ついで府立四中の前身である城北中学、府立一中などが隆盛になった。そのころ明治二十五、六年には、艇は船の型が鯨船などに使用の、舵も艫もとがった前にも後にも漕げる四撥艇を使用していたが、速力が遅いために速い艇が出現し自由闊達の気がみなぎり、運動方面も俄然活気が溢れ始めた。

そのような開放期の生徒気風の一端は、つぎの一文によって鮮やかに写しだされている。

「多感なるは詩神なる哉、美妙なる宇宙なる哉、茫々たる蒼空、目月星辰懸り、渺々たる大海、河嶽林連る。春には紅花鶯月あり夏には暗砌蛍火あり、秋は銀月の皎々たるあり、冬には雪花の繽紛たるあり、仰ぎては巍々たる高嶽を天辺に眺め、伏しては落々たる河海を地上に見る。或は雨となり、風となり、雷となり、火となり、何れ造化の美妙を尽して其の秘密を洩さざるなし、是れ抑も何の故ぞ、詩人墨客の腸を記さんためか、雲師月客の閑暇に資せんためか、否々奇人は知る、曰く一層大なる目的のために造られたるを。知らずや蒼天を摩す既の青年が元気を鼓舞せんためなるを」

このようにして運動競技が盛んになり、それが部活動的な形を整えてきたのであって、現存する資料からでも、当時の記録にこの頃から撃剣、柔道部大会、春季大運動会、秋季大競漕会、運動部改選、四月市陸校野球試合などと運動部活動の文字が頻繁に現われてくる。

さて、本稿では運動部の華、ボート部が如何にして誕生したのかから述べることとする。

日本におけるボートの草分けはなんといっても海軍と在留外人が最初で、明治維新前すでに海軍ではボートを漕ぎ始めていた。ボート競漕の嚆矢は、明治十七年十月東京大学が向島言問付近で実施したのが始まりで、その中学のボートでは開成中学が盛んになり、ついで府立四中の前身である城北中学、府立一中などが隆盛になった。そのころ明治二十五、六年には、艇は船の型が鯨船などに使用の、舵も艫もとがった前にも後にも漕げる四撥艇を使用していたが、速力が遅いために速い艇が出現し自由闊達の気がみなぎり、運動方面も俄然活気が溢れ始めた。

そのような開放期の生徒気風の一端は、つぎの一文によって鮮やかに写しだされている。

「多感なるは詩神なる哉、美妙なる宇宙なる哉、茫々たる蒼空、目月星辰懸り、渺々たる大海、河嶽林連る。春には紅花鶯月あり夏には暗砌蛍火あり、秋は銀月の皎々たるあり、冬には雪花の繽紛たるあり、仰ぎては巍々たる高嶽を天辺に眺め、伏しては落々たる河海を地上に見る。或は雨となり、風となり、雷となり、火となり、何れ造化の美妙を尽して其の秘密を洩さざるなし、是れ抑も何の故ぞ、詩人墨客の腸を記さんためか、雲師月客の閑暇に資せんためか、否々奇人は知る、曰く一層大なる目的のために造られたるを。知らずや蒼天を摩す既の青年が元気を鼓舞せんためなるを」

このようにして運動競技が盛んになり、それが部活動的な形を整えてきたのであって、現存する資料からでも、当時の記録にこの頃から撃剣、柔道部大会、春季大運動会、秋季大競漕会、運動部改選、四月市陸校野球試合などと運動部活動の文字が頻繁に現われてくる。

さて、本稿では運動部の華、ボート部が如何にして誕生したのかから述べることとする。

日本におけるボートの草分けはなんといっても海軍と在留外人が最初で、明治維新前すでに海軍ではボートを漕ぎ始めていた。ボート競漕の嚆矢は、明治十七年十月東京大学が向島言問付近で実施したのが始まりで、その中学のボートでは開成中学が盛んになり、ついで府立四中の前身である城北中学、府立一中などが隆盛になった。そのころ明治二十五、六年には、艇は船の型が鯨船などに使用の、舵も艫もとがった前にも後にも漕げる四撥艇を使用していたが、この頃から撃剣、柔道部大会、春季大運動会、秋季大競漕会、運動部改選、四月市陸校野球試合などと運動部活動の文字が頻繁に現われてくる。

さて、本稿では運動部の華、ボート部が如何にして誕生したのかから述べることとする。

日本におけるボートの草分けはなんといっても海軍と在留外人が最初で、明治維新前すでに海軍ではボートを漕ぎ始めていた。ボート競漕の嚆矢は、明治十七年十月東京大学が向島言問付近で実施したのが始まりで、その中学のボートでは開成中学が盛んになり、ついで府立四中の前身である城北中学、府立一中などが隆盛になった。そのころ明治二十五、六年には、艇は船の型が鯨船などに使用の、舵も艫もとがった前にも後にも漕げる四撥艇を使用していたが、速力が遅いために速い艇が出現し自由闊達の気がみなぎり、運動方面も俄然活気が溢れ始めた。

そのような開放期の生徒気風の一端は、つぎの一文によって鮮やかに写しだされている。

「多感なるは詩神なる哉、美妙なる宇宙なる哉、茫々たる蒼空、目月星辰懸り、渺々たる大海、河嶽林連る。春には紅花鶯月あり夏には暗砌蛍火あり、秋は銀月の皎々たるあり、冬には雪花の繽紛たるあり、仰ぎては巍々たる高嶽を天辺に眺め、伏しては落々たる河海を地上に見る。或は雨となり、風となり、雷となり、火となり、何れ造化の美妙を尽して其の秘密を洩さざるなし、是れ抑も何の故ぞ、詩人墨客の腸を記さんためか、雲師月客の閑暇に資せんためか、否々奇人は知る、曰く一層大なる目的のために造られたるを。知らずや蒼天を摩す既の青年が元気を鼓舞せんためなるを」

このようにして運動競技が盛んになり、それが部活動的な形を整えてきたのであって、現存する資料からでも、当時の記録にこの頃から撃剣、柔道部大会、春季大運動会、秋季大競漕会、運動部改選、四月市陸校野球試合などと運動部活動の文字が頻繁に現われてくる。

さて、本稿では運動部の華、ボート部が如何にして誕生したのかから述べることとする。

日本におけるボートの草分けはなんといっても海軍と在留外人が最初で、明治維新前すでに海軍ではボートを漕ぎ始めていた。ボート競漕の嚆矢は、明治十七年十月東京大学が向島言問付近で実施したのが始まりで、その中学のボートでは開成中学が盛んになり、ついで府立四中の前身である城北中学、府立一中などが隆盛になった。そのころ明治二十五、六年には、艇は船の型が鯨船などに使用の、舵も艫もとがった前にも後にも漕げる四撥艇を使用していたが、この

英語と私

(S24)　堀出一郎

中学、高校時代に習った知識のなかで、今なお、役に立っているものに英語がある。何しろ、中学、高校、大学と、十年間も教育をうけているのだ。

しかし、習った期間の割に上達度の低いのも、また英語である。十年もやっていて、ロクに外人と口もきけない。一体どういうわけであろうか。

七年も前のことだが、社命で、ニューヨークに駐在したことがある。出発前、アメリカ人から「君はアメリカへ来たばかりなのに、英語がうまい」とほめられ、冷汗をかいた。

たしかに、アメリカへ来て、僅か数ヶ月である。それは事実だ。しかし、それまでに十年も英語を勉強したことはトンとお気付きでないのだから始末が悪い。一ヶ月や二ヶ月の滞在でおぼえた英語にしては出来がよいというのだから、ほめられて、穴に入りたい気持ちで一杯だった。

だから私は、アメリカ人にきかれても、決して「十年も習った」とは、いわないことにした。バレたら「低脳扱い」にされることが火を見るより明らかだから。

しかし、実際のところ、私は、十年の間で、英文和訳、和文英訳、英文法を習ったが、英会話は習ったおぼえがないのである。

いまの津高はどうか知らないが当時の津中、津高では、英会話の授業はなかった。教科書も、英文学、米文学の古典を中心に編まれており、内容は、高3になるとかなり程度が高くなり、ジョンソン・ロックやフランシス・ベーコンなど哲学ものが混ぜてあり、むしろ、のちに学んだ二橋の英語の方が、ずっとやさしかったことをおぼえている。

こういった英文学の程度の高いものを、私達に興味をもたせながら、かみくだいて教えて下さったのが住井先生である。

住井先生から私達が学んだものは、英文学へのあこがれであり、学問への憧憬であった。決して、受験英語ではなかった。先生が住んでおられた津中の寄宿舎のお部屋で、先生の愚師であられた広島高師の小川先生のワーズワースの詩集を見せて戴き、その翻訳に、住井先生も驚かされたことをうかがいながら、英文学へのあこがれに心を燃やしたことなど、すでに二十年以上も前のことだが、今でも、あざやかに思い出すことができる。

先生から教えて戴いたワーズワースの詩「ハリタリー・リーパー」など、今でも、その一部をフラフラ口ずさむことができる。

そういうわけか、今でも、海外へ出かける時には、いつも、事前に調べておいて、できるだけ英文学の旧跡をおとずれることにしている。最大の楽しみの一つだ。アメリカでは、ホーソン、アーピング、エマスン、オルコットなどの旧跡をおとずれた。また、昨年の夏には、スコットランドの北部で十日間を過ごすチャンスに恵まれ、ワーズワースの本場をたずねることができた。時のなかに出てくる「ハイランド」の現場にふれ、雲の如く」歩きまわった。

この年齢になって、中学時代に習った詩を楽しめるのも、住井先生のおかげである。

素逝のこと

(S19)　中井正義

陳川同窓会「会員名簿」には、後年名を成されたいく人かの先生の名が見られる。後に黒田清輝、岡田三郎助と並称され、「匂い」「習慣」などをものにされた藤島武二、「奉天入城図」「九月一日午前十一時五十八分」で知られる馬上太郎、「夜行汽車」で巨星と目された赤松麟作（「厚物咲」で第七回朱川賞をうけ「デニヤンの末日」「霧命」「碑」「芭蕉庵桃青」を書いた中山義秀、宮田空穂門あって美しい愛恋の歌を詠みつづけた桜原繁一郎（本名巻巻恵）――など、たちどころにその名と作品の想起される人たちであるが、大正十三年津中学卒業、三高天大をへて昭和九年母校教師として着任した長谷川直次郎・素逝もその一人であろう。

私が入学した昭和十四年、素逝は、すでに砲兵中尉として中国の戦場にあった。その戦塵の中から生まれたのが当時戦場俳句最高のものとして一世を風靡した句集「砲車」であるが、その存在を知ったのは伊藤太郎先生によってであった。

ある日、図書室へはいって行った私に一枚の刷り物をくださった「砲車」抄であった。

夏炎々る砲車とともにわれとそ征けゆくわれいくさの屍の明冷節わが馬をうつむと兵ら枯野駆る おほ君のみ栖と月によとたるかの丘にとれの枯野に友ら死に き凍る断層黄河朗起りし地凍る漢民族の大喜酣士

私は先年、小説「文寮」に「長谷川素逝ノート」を連載、今また伊藤新聞に「素逝秀句」を発表しつづけて五十回を超えたが、中学一年の時代、伊藤太郎先生からその一枚の刷り物を貰わなかったら今日素逝に燃やす情熱は胎生しなかったかもしれない。

素逝は戦野で病を得、内地帰還再び母校の教壇に立つわけだが、やがて中南支等学校教授として漢中を去り、療養と作句ひすの生活がつづく。そして「砲車」のあと三年三ヶ月「幾山河」「ふるさと」「村」「暦日」といった句集編まれ、俳論集「俳句誕生」が生まれるわけだが、一主都松ケ崎村、多賀郡斎宮村等々にあってもっぱら、ふるさとの風物を叙しつつ、すからの思いを裏白したようである。

くはるあ水田八日のよもぎ飾けげば田を鋤けとつぼめにせかされて

表紙のさなかの鶏もはつされば百姓の夜ばなんばんの間にほふ水鶏が嫁ひきとれとなったとか足袋つづるくらくて低き灯くらがり

句集「村」からの抄出であるが何というあたたかい句であろう。百姓の心をとしなければ詠み得ない境地なのである。やがて「暦日」に移行するわけだが、背戸の寒の水のはひりし田のにほひ

といった句から、いわゆる素逝落葉リリシズムとなる。

暮れてゆく落葉おのおのが位置

刻々と土の落葉の暮るるのみはなれたる朴の落葉のくるあいだいちまいの朴の落葉のありしあと

余物の絶に去った簡浄な表現の中に、瞬時ひそむ悠久をみることのできるのである。

しかし、「砲車」の力感あふれる句に比して、何という繊細な句であろうか。水か空気のような境地への到達――と言えば言える。

このころ、よほど病気は進行していたのであろう。一句一句の中に素逝の思いを感じとらざるを得ないのである。

昭和二十二年十月十日早朝素逝は国立大阪療養所において亡くなった。行年四十歳であった。かつて一歩に師田男、西に素逝といわれ、短い生涯であったにかかわらず、数々の句集と「阿漕」「桐の葉」「書痴」等々雑誌の創刊その経営、遺句をはたした業績はまことに偉大である。あまり表面に出たがらぬ人が多いが、素逝の影響を受けた俳人は三重県内はもちろん全国にかぎりなくある。京都の「京摩子」には都峰氏が「素逝ノート」を書き、先年名古屋から届「の「素逝研究」が単行本となって出た。私もまた、一後輩として、まだひとりの文学の徒として「長谷川素逝の人と作品」について書きつづけてゆこうと思う。

(47・1・2)

意欲を燃やそう

(S27)　落合哲男

中学時代の私の将来の希望は、英文学者になることだった。大学受験に当り、住井先生に「英文学者といっても、斉藤勇先生のような大先生になれるのは、何百人の一人位で狭い門だよ。せいぜいなれて地方大学の先生だ。それよりも、経済学部か、法学部にすんで、サラリーマンになり、趣味でやった方がよい」とさとされ、文科志望を綿々涙に切りかえたことを覚えている。その結果、いまでも、しがないサラリーマンをやっているが、高校を出て二十年たった今日、果して選んだ道が正しかったかどうか、やはり疑問を感じている。不惑の年齢になっているにもかかわらず、まだ迷いの域を脱し切れない。情ない次第である。

㊞サントリー株式会社
マーケティング室　堀出一郎
㊞昭和25年3月
津高等学校（西校舎）卒

数日前の大相撲初場所がはじまったが、この数場所大関の相撲が批判の的となっているが、今場所も現在のところ芳しくない成績で、愛好家にとっても心から楽しめない現況にはあるが、意欲を失い、又は努力の足りない者が次第に第二線より遠ざかって行くプロスポーツのあわれさ、悲しい社会を見る時、世間のサラリーマン根性云々されるこの頃、心を反省させられると共に、我々もそれぞれの分野における「プロ」であり、又プロ根性に徹しなければならない。

しかし、それは自分自身の意志と能力であり、自分自身の仕事において他に負けないという自負心や、打ち克たねばならないとして常に己に言びしてある事と思う。

私共の集団一番において、所長以下仕事に対して意欲的に「やる気」のある現場は立派な成績をあげることが出来るが、一方意欲に欠ける場合はなかなかといってよいほど発注者よりのクレームがあり、かつて成績に終止する現実を周囲に見る。

では意欲を燃して常に事に当るには如何にすれば出来るのであろうか。

私は数年前に「蠟の生一本」で知られる神戸で工事をした際、菊正、白鶴の銘酒が如何に長い歳月と、幾多の人の研究努力等により生み出されて来たことを、宮水と呼ばれる酒の素である地下水と工事の関係で教えられた。意欲を常に燃え得ることは、時間とそれをはぐくむ環境を各自の周に造ることに偉大である。あまり表面に出たがらぬ人が多いが、素逝の影響を受けた俳人は三重県内はもちろん全国にかぎりなくある。京都の「京摩子」には都峰氏が「素逝ノート」を書き、先年名古屋から届「の「素逝研究」が単行本となって出た。私もまた、一後輩として、まだひとりの文学の徒として「長谷川素逝の人と作品」について書きつづけてゆこうと思う。

(47・1・2)

第一は、対人関係をよりよくすることと思われる。如何に個人が努力を払っても対人関係のバランスが保てなければ、それは空まわりとなってしまう。社会は人間の集りである。人との接触なくしては一日も社会活動を送れない。しかし人間は協調を求める一方では、個人の権利を主張し、又固執しようとする。だがこれを克服して、そこ正しい調和のもとに各自が意欲的に物事に取り組む事が出来る。それには各自の明日のあらゆる人との交りにおいて、相手に対する深い理解、思いやり「人を愛する」事に各自が常心に止め、その実践に努力を払う事ではないだろうか。

第二には、常にフレッシュな気持ちで物事に取り組むことではないかと思う。如何に一事に経験を積み熟練していてもマンネリになれば意欲は減退する。年齢、経験等を超越したフレッシュな気持ちで、自信をもって常に物事に当りたい。しかし自信過剰には留意したい。自信過剰は謙虚さを失うことに通じるフレッシュな気持ちとは若者のみの特権ではない、伊能忠敬は50歳から測量学を学び日本地図を作り上げた。

第三に常にその根をもつことではないだろうか、それは各自の目標であり、又幸福感を常にもたずしては意欲は湧かない。幸福とは定義又幸福感の度合は各自により異るであろう、しかし何らかの形で不満を抱き、又自分は未だ満足と思い込むことがあってはならない。何らかの形で自分の幸福を定義づけそれに向って努力することが必要と思う。私は人並幸福ある人より幸福とは、お互に本当に信頼し合える夫婦、同僚、後輩の名を問われた時即座にその名が言えることであると話され、以来その言葉を心に刻んできた次第でありますが、今回同窓会誌に寄稿を命ぜられ、関連ある言葉として最後に書かせて戴きました。

意欲と努力、それは事においても人生を有意義に生き抜くためにおいても最も肝要なことではないかと思う今日此頃です。

私、社会へ出てからまだ15年、今までの大半を地下鉄工事を主とする都市土木建設工事に従事して参りましたが、今後共一層の意欲を燃し夜力ではありますが建設工事の伸展に努力を払う気持ちをこめまた新しく、地文をとじさせて戴きます。

（筆者：写真右は前田建設工業㈱横浜支店勤務）

無資格教育パパ

(S27)　丸谷芳雄

私は津高を昭和二十七年度の卒業でありますから、おおよその年格好が想像いただけるものと思います。

私は男ばかりの三人兄弟で、私が一番下で長兄との間には十歳以上の開きがあります。

津高の三年生になったとき、いよいよ受験校決めなくてはというので、そのための父兄会が開かれました。

私は母が年老いてからの子供で、かつその当時父は病床にあったので、私のことはすべて長兄夫婦と相談して決めておりました。

丁度その父兄会の日は兄夫婦の都合が悪く、一番目の兄嫁が代って学校に行ってくれました。

その時どんな話として、担任の先生とどのようなやりとりがあったのか、いまになっては記憶から遠ざかっておりますが、要するに望みが少し高すぎる、実力に見合った学校を受験されてはという話であったらしいのです。

そうらしいというのは、過日その一番目の兄嫁が娘が高校に入学したといって十数年ぶりに上京して参りました。

その時そのお兄嫁が、突然といって話するところによると、私が高校三年のときの父兄会に行って、私が密かに某大学を受けようと思っていることを担任の先生に相談したところ、とんでもないその成績ではーと言われたらしいのであります。

どうぞ、私たちと同じように、私たち夫婦は子供たちに学校時代は優秀な成績であったと思い込ませております。

それが一瞬にして、父親としての面目も権威も失ってしまいました。それとともに兄嫁の記憶力の良さに困惑した次第です。

それは兄、父親としての扱いが大へんぞんざいになったと思うのは、私の僻見でしょうか。

それまでの子供たちは、パパは学校時代は極めて優秀な成績であったと思っていたのが、そうでなかったということを目撃したばかりか、女房にまで学生時代の成績がバレて、我が家におけるパパの威力はまったく台なしになってしまいました。

これでは教育パパは根底から失格であります。

思い起こせば、当時向学の志に燃えていた私の心は挫折しましたが、その私を勇気づけてくださったのが生物の国府先生でありました。国府先生に兄嫁の話をいたしましたところ、先生は「君の勉強には暗いがある。思考に暗い必要なんだ。そんなことでくよくよせずまずは挑戦してみることだ」と勇気づけて下さいました。

当時の私は、この一言でどれほど勇気づけられたかわかりませんむしろ、今日の私があるのは、その時の一言が大きく影響していると思います。

よく"蠟は失っても後日ともどすことができる。また名誉を失っても努力次第では回復できる。しかし、いったん勇気を失ったらそれは自分のすべてを失うことになる"といわれます。

私も子供が中学を受験する年ごろになり、二十年前の学生時代、それぞれの先生がたより、数々の心に残る教訓を回顧し、その一つ一つに深い思い出がありますがその中でも国府先生の一言は強く私の心に残っている人生の大きい教訓であります。

子供たちにも私が学生時代教えていただいた教訓のなかより、いかなる困難にぶつかっても、それに挑戦する勇気と、何ごとにも誠実に取り組む努力をうしなわないよう教えている今日の頃です。

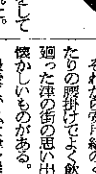
昭和十六年・津中時代の懐古

（元旧制津中教諭） 三好 清

昭和十六年、それは日本が太平洋戦争に突入した年であり、私の教員生活の第一歩が津から始まった年でもある。東京高師卒業のとき赴任先を「つの中学」と言われて何処だかも見当がつかないで問い直したら「伊勢は津でもつの津だよ」と言われ、数少ない県庁所在地への赴任を欣んで行ったことを思いだす。当時は日支事変が膠着して次第に窮屈な時代になっていたが未だ戦前の良き時代の面影を留めた津は誠に楽しい所であった。一年足らずの期間ではあったが、それから後が戦地における悲惨な暗い生活の連続であったせいかそれは私の短かい青春であったとも言えるので、今はもう過去としているけれども数々の楽しい思い出が尽きない。

ことに一冊の色あせた綴りがある。徹底的に探したものであるが、驚して「三年の声」。昭和十七年一月・入隊のため離任に際し当時私の担任だった四年B組の諸君が作文の時間に送辞を作ってせられた私に対する感想文の綴りである。これは若い未熟な私の一年間の足跡が純心な生徒諸君の心に如何に反映したかを如実に物語るものである。今はもう切れるような諸君の面影を追いながら一枚一枚読みかえしてみたが、当時は太平洋戦争終戦の勝利に湧きかえっていた頃であり、学校教育までが国家一色に塗り潰されていた時代であるから隠せぬ感と共に一種のおかしさがそうも感じさせはされない。もろもろの学校行事・遠足、運動会、水泳、作業などすべて、その眼目が「鍛練」ということであったことへのささやかな抵抗やひそかな腕白ぶりなどが推察されて微笑ましく思うことも然りである。諸君も今これを読んだらどんな純情なときもあったのかと驚くと共に面映ゆく感じるとが沢山あろうと思う。当時私は四年の物理・二年の化学、一年の数学、理科を担当したと思うがその頃若い独身の教師は私一人だったので表さという点では師か諸君の共感を得たようであるが授業に到っては不満であったことを察知すると共に好き勝手なことをやって先輩の先生方のひんしゅくを買ったであろうと汗顔の思いをしている。

次に忘れられないのは、在任中米本先生の非常な知遇を得たということである。私の津の印象は先生との交友に尽きるといっても過言ではないと思う。人生「出合い」につれ出して専門的な調査をして文学的素養を植えつけてくれた。あとの方は初めは余り有難くなかったのだが回を重ねるにつれて何となく同化していったように思う。現在多少とも私に芸術的感覚を解する心があるとすればそれは一に先生の感化に負う所であるといわねばならない。津高に現在も先生が健在であることを私はみれば先生との出合いは私の人生態に一つの追記をやってくれたものと感謝せずにはおれない。当時先生は新婚の頃であったがよく一緒に酒を飲み歩いたり語り明かしたり何かにつけて正義感とヒューマニズムの見事な調和の無言のうちに教えてくれたのみならず、休日には度々山巡りや名所旧物



といったことが言われるが、考えてみれば先生の出合いは私の人生態に一つの追記をやってくれたものと感謝せずにはおれない。当時先生は新婚の頃であったがよく一緒に酒を飲み歩いたり語り明かしたり何かにつけて正義感とヒューマニズムの見事な調和の無言のうちに教えてくれたのみならず、休日には度々山巡りや名所旧物

在も先生が健在であることを私は津高のために慶びたいと思う。

次に思い出すことは、バレー部のことである。自分も一生懸命だったし最も気合いのかかっていた時だから部員の諸君も大変であったと思うが、今の国体の前身である神宮大会の予選に勝ってヤレヤレと思ったら、その年は中等学校の部がなくて結局一般男子として優勝して東京へ行ったのだからいい思い出を残してあげたと思っている。佐藤君は、戦後一度会ったが、他の諸君は元気でやっているかしら。

それから毎月約のくせに部あたりの腰掛けでよく飲んでは焼び廻った津の街の思い出もまた一入懐かしいものがある。

最後に、私は津を離れて一年後の昭和十八年三月・度担任だった諸君が卒業の頃戦地へ、台湾、パラオ、ラバウルなどを経て東部ニューギニヤに転戦、ウニウクで終戦を迎えた。辛酸縷に取り残されたまま内地からの補給もなくジャングルで自活しながらの戦闘で誠に惨憺たる目にあったが九死に一生を得て二年末復員、栄養失調と悪性マラリヤに悩まされたが幸い元気を恢復、二十二年私の母校高松中学に転任、この間資格審査を受けるために原籍津を訪れたが、街は戦災、学校は焼かれて新町小学校に間借りという状況で大変でした。健康の恢復を図って勉強のやり直しに二年二年から東京文理大へ遊学後再び母校の高松高校へ帰り、その後県内を二三転任して現在に到り、この二月で五十四歳になる。

当時紅顔の少年諸君のうち何人かは戦争などの犠牲になったと思うが酷しい試練を堪え抜いた諸君は等人生の油の乗り切った時期を各方面でご活躍ときいたであろうが一層のご健闘と津高校の発展を切に祈ります。

現住所＝香川県綾歌郡綾南町陶五七六三
現　職＝香川県立高松東高等学校長

旧師短信 (2)

津高の部

城川 四郎

終戦後間もない頃の大層の兵舎で学んだ諸君お元気ですか。旧制津中の最後の二年は物資不自由の極貧時代で、思い出しても哀れな生活を強いられたものでした。それでも自由と清新な花の息吹を津中という唐まれ場で諸君と共に享受することができたことのみは得がたい宝となりました。

小出 幸三

津高時代も遠い思い出となりましたが、その印象と感動は今も強烈です。朝日歌壇に時々出る拙詠を読んだと言って教子が便りをくれることがあります。嬉しいことです。四十八歳になりましたが元気で夏の半ズボンも苦りません チェリー亭を閉じ公園墓地の近くに新築移転しました。

小林 尚志

県教委指導課に入って五年になります。津高の教子の方々が各校で大いに活躍しておられるのに接し心強く感じています。さて津高赴任の二十八年から始めたアマチュア無線は自宅でも続けています。ハムの方々4-A-2-2のコールサインが聞えたらご応答ください。

倉田 有武

「ミスターA」「アエス・サー」「ミスターB」「ヨイヤサー」「ミスターC」「ヨイヤサー」機知に富み朗かな生徒諸君との楽しい日々でした。英語の授業よりも、折々脱線して黒板に画いた漫画に拍手して呉れたあの頃の少年少女の多くが既に立派なパパやママであることを思うと感慨無量です。

桜井 智治

皆様と共に感謝と喜びと二十四年、戦時、敗戦、新学制、民主主和、安保体制と激動の昭和史をのものでしたね。「秋初冬の月清く澄める夜空をより仰ぎ」燃やせかがり火胸の火を、強き津高の意気揚る」この名出詞の作詞をぜひおきかせて下さい。そして高らかに歌揚げましょう。

斎藤 金男

一、精神的な張り合いをもって日常生活すること、二、無理な勤労をさけること、三、アルカリ食品を常に摂取すること、四、温気に気をつけること。

皆さんにはお遠い話ですが、平素のご無沙汰のお詫びに、老化防止策を私の経験からお伝えします。今では内外合せて孫八人です。

市川 一郎

昨年八月から四月市教育長に就任しました。市内には陳川三重桜の方も沢山おいでになり、私の津高在職当時の本業未だ不合格であることを思うと津高をなつかしく思い出します。津高の大発展の時のような元気を出せと励まして下さる方もあります。幸いに身体の調子もよろしいので思いがけなくも引受けた責任だけは果そうと思っています。

常井 靖夫

同期の森田喜男が森脇の合掌造りを矢谷の地に移築した。その披露の招待状は簡潔ながら花園産保存に多くを義務にして来た彼の人柄がにじみ出ていた。一昨年頃大学を出た津中から就職の挨拶状や賀状を数多く受けた。自筆のものには多くの親しみを覚えたが、印刷されたものの多くには「小生・・・」とあった。「小生・・・」には苦笑した。

吉田 久六

津高を最後に公立学校から退き三重高に勤務しています。三重高というと、あっちの野球学校かと言われますが、野球だけでなくあらゆるスポーツが盛まれた環境や施設のもっとすばしく訓練を受けた賢者は、小学校の先輩の松田幸生、時田信民、小柴修の四君を決定、続いて五一会の基金募

西川 棟伍

退職後四月市の教育長になりました。後任は前の校長西川一郎さんで妙なめぐりあわせになりました。

やめてからしばらくブラブラしていましたが激務から開放された後に来たものは、不健康状態でした。今は少し元気もとって来ました。くれぐれも皆さんの心身の健康をお祈りします。

住井 靖

昨年四月四日市高校へ転任しました。一年の授業を持ち野球部の仕事を手伝っています。はじめて教師になって父兄の兵舎既に津中三年五組の担任をさせていただいたのはついこの間のような気がしますが、もう二十六年近い教員生

昭和四十七年度 津中五一会総会の報告について

彼乱続きであった七二年も暮れ世おしの七二年を迎えた三月九日午後〇時から津中昭和十年、第五十一会卒業生クラス会（五一会）の総会が、津市桜橋の新楽なった三重県社会福祉会館で盛大且つ有意義に挙行された。

先ず年度幹事の中川弘一君の挨拶に始まり、辻嘉一君の会務報告を経て次期の年度幹事に吉田義男松田幸生、時田信民、小柴修の四君を決定、続いて五一会の基金募集についての件を承認して総会を終った。

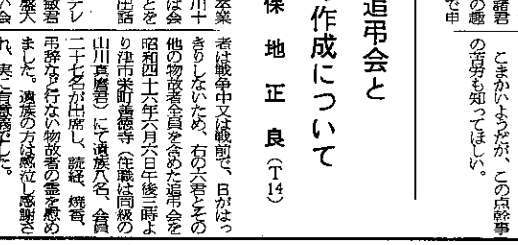
引続いて招待先生方への近況を承り林先生の音頭で乾杯しその後会食に移って大いに飲み且つ語り尽きることなし。午後二時頃「伊勢大神のあるとか……」の校歌を合唱しながら散会した。

なお招待申し上げた先生は、絵の林義朗先生、英語の高橋雅先生英語のなみちゃんと山田文美先生、園芸の現在三重大学農学部教授の位田藤久太郎先生でありますが先生方御老体の林先生を始め皆御元気にて活躍されていられる由。

さて私達毎年この会をもっていますが年々会も発展しているものの年齢も既に五十四、五歳になり各界の中堅幹部として活躍中ではあるが、停年近しの感なしたいて心淋しきものもあり、従ってこの会を通じて大いに誘り合っているふしぶしに互助の気持ちがあらわれていて誠に心強いものを感じた次第である。（昭和四十七年度幹事内田三郎記）

昭和14年同窓のつどい

岩田 直衛（S14）



昭和十四年三月本業生というと太平洋戦争で敵っていた同窓生も多く、我々は生残りという感が深い。私は母校に勤務している関係もあるので、万年幹事という次第。毎年春に会合を持つことにしているが幹事の怠慢で抜けてしまうこともある。昨年はオープンで間もない津新町の洞津会館で恩師・野村毅太郎先生をお招きして開く、鉄棒の坂上りの出来ない私にとっては〝小野堅〟というとこれ先生ぞ私の他にも坂上りのため放課後残されて練習させられた者もかなりいた。だが先生のイメージは卒業後お目にかかると今でもあの実にあたたかみのある先生で、三重大を停年退職され、現在は知県の私大に教鞭をとっておられる。一度も病気したことがないとおっしゃる先生がけにお若い。

この会では出席するメンバーが固定化されてしまっていつも二十数名の出席だが、今年は三十数名の出席となり、中に卒業後はじめて出席したという給湯第者が埼玉県よりみめうるわしいお嬢様をつれての出席もあった。毎年出席しているとお互の変化はわからないが、久し振りに会う諸君をみると変ること変ること。三橋円もたっぷり腹に詰まっているような推薦型から、きりぎりすのようにやせてはいるが幸運をつかんでいる人、ソクラテスもいる。しかしみんながどのひとも義業を示れ、あの三千数年前の津中時代の感慨にふけっているにちがいない。その後の歴史が彼に年輪のように深く刻まれている。楽しい語らいがしばらく続く。

この席での提案で一口一、〇〇〇円の弔慰金を集めることになり出席者は勿論拠出していただいたが、当日欠席された同級生の諸君の御協力をお願いしたい。その趣旨はお目出度いことでないので申訳ないが、農近同級生の死亡が続き、その都度有志を集めて香奠をお供えして来たが、ある程度平常化を積立ておくようにするの為。拠金してお写真に長生きをしていただきたいものである。その後奥田静夫君が昨夏なくなり、早速この金で御仏前を供えたら、同窓会の写真代が赤字になって墓参の底をついてしまった。

ところで幹事故させは出席の返事をいただきながら欠席されることだ。その内どられると思って准文した料理代の支払ときがない。

こまかいようだが、この点幹事の苦労も知ってほしい。

陳川十四会追弔会と名簿の作成について

保地 正良（T14）

大正十四年三月、津中学校卒業者を中心としたクラス会を陳川十四会と名づけ、毎年二回以上は会合して、お互が健康であることを感謝しながら腕白時代の想い出話に花を咲かせています。

これは三重交通会長で東海テレビ社長をしておられた宮原三郎君が中心で、終戦後からは特に盛大に行われるようになり、楽しい会合を続けていました。出席者はいつも三十名前後で他級の者から羨やましがられる程、仲がよく、集りのよいことを誇りとしていました。

ところがこの宮原君が昭和四十六年三月二十日、心筋こうそくで突然亡くなり、十四会員はたびたび悲しい、悲歎に暮れるのみでした。

この年は同級生の死亡が続く年年で、一月十八日には級長田上林勝郎君が交通事故にて亡くなり、驚き悲しみました。二宮原社長の小林義四郎君の告別式は昭和四十五年九月十二日に西来寺にて行なわれ、県議会議員の前田義蔵君は三十三年三月九日に長逝され四十年十一月四日に樋口久弥君が他界されました。それ以前の物故者は戦争中又は戦前で、Bがはっきりしないため、右の人名とその他の物故者全員を含めた追弔会を昭和四十六年六月六日午後二時より津市栄町善徳寺（住職は同級の山川真慶君）にて遺族九名、会員二十七名が出席し、読経、焼香、弔辞など行ない物故者の霊を慰めました。遺族の方は感泣、感謝されて、実に有意義でした。

会員名簿を作ってほしいとの声があり、昨年六月より、おはるタオル社長森田清君と私とが旧名簿より調査訂正し八月末に印刷を完了、十月始に各人あて発送しました。

これを見ると物故された者五十数名、現存し連絡のとれる者九十六名、現存しているが連絡のとれない者十一名です。

この名簿には大正九年四月に県立津中に入学した同級の方も記載し、物故の方は消明の分のみ、まとめて後記しました。現存の関部佐倉鉄太郎先生、高野鶴二先生の四先生で、長谷川勉二郎先生は四十六年一月三日に東京都品川区豊町三丁目九の自宅でなくなられました。

支部だより

大阪

ニクソンドルショック以来のきびしい経済環境の中で昭和四十六年度津高大阪同窓総会は、十一月十四日大阪梅田の阪神百貨店七階グリーンルームにおいて、本部より大藪同窓会会長、岡津、竹島両副会長、母校より米本教頭先生、岩田先生並に在阪の山田清一旧恩師を迎えて十名の会員が集って開催されました。

記念撮影を済ませて懇談に入り野崎幹事長（T10卒）の開会の辞に始まり、野田会長（M42卒）の挨拶、大藪同窓会会長の祝辞、米本教頭先生の母校近況報告があり盛親会に入りました。

各年次グループのテーブルでは旧友の近況から学生時代の苦を懐びつつ心と心の触れ合いをして友情を温める風景がみられました。ビールの空壜がテーブルに並ぶころより司会者の活躍で竹島、山田西川恩師の話、和田大先輩（M44卒）の同窓会との御教示、大正昭和の陳川、三重桜、津高とそれぞれの時代を代表された方のスピーチから校歌斉歌部歌の合唱に賑やかになり、特に鈴木君（S7卒）の海軍兵学校時代より訓練（？）を重ねられた歌と踊り「憂愁かつら」は万雷の拍手を浴び、一時過ぎ近野顧問（M42卒）の発声で万歳を三唱し盛想に終了閉会しました。

閉会後会場にては大藪会長を中心に野球部本塁クループ、或は昭和二十一年と二十三年卒業の三重桜組がそれぞれ夕刻まで夫グループの会を開き、折角の機会を生かしてお互の友情を温め歓談をつづけました。

なお今回事務局として会員への通知状の発送整理に絶大のお力添を頂いた岡部君（S30卒）と当日の司会者近藤君（S29卒）に感謝の意を表し、また当日欠席された会員の方々に代り厚くお礼を申し上げます。

次回の昭和四十七年度総会は今秋十一月十九日（日）十二時より大阪梅田阪神百貨店七階グリーンルームにて開催しますから多数御出席下さい。とうぞ皆さんお互に誘い合って特に津高時代のクラスメイトに出席して頂きたく思います。そうして幹の会（クラス会）は勿論幹の会（同窓会総会）に出来る限り大勢の方々が集まり皆様方の顔を揃えて話し合って頂けたら一層親しみも増し同窓会の意義も深まると思います。

〒531 大阪市東淀区深江南二丁目一〇番一五号
野崎病院内
津高大阪同窓会
電話06－九七一－三五〇六
小津正次郎（S7）

京都

津高京都同窓会第五回総会は、昭和四六年九月一六日（日）礼の森の生研会館ホールで午前一一時から開かれた。当日は不意打ちに阪神地方に降った台風第二九号による悪天候にも拘らず、本会のために津からわざわざ小竹校長、大藪同窓会会長、竹島副会長及び市川教諭の御臨席を得て、会員三三名（男一七名女一六名）出席の下に開かれた。

先づ中村実部会長より挨拶があり、来賓祝詞として小竹校長より母校津高の近況の報告があり、最近高校の生徒もすっかり落付き進学率も県下一と聞いて、光栄ある陳川・三重桜の歴史の維持に努力されている諸先生方並に在学生たとは当日のハイライトであった。

尚今般代会長森田慶二氏は、御大変共々東京に転任、又二代目都を去られることになり、会として誠に寂しい限りであり、両先輩の長らくの同窓会への御厚力に感謝すると共に、両氏の御多幸を御祈りして戻い。

当日選出された新役員は次の通りである。

会長　柳瀬　兼助（大14）
副会長　中山　保（昭2）
〃　笠原ゆきを（大15）
幹事　中井　米彦（昭8）
〃　岩田　次男（昭16）
〃　喜田　輝清（〃）
〃　伊藤　隆宣（〃）
〃　中西　皖（昭23）
〃　大野　篤子（昭3）
〃　野間　縷子（昭4）
〃　山本　ヤエ（昭5）
〃　後藤　知子（昭13）
〃　和多田多枝子（昭14）
〃　小西　鄭子（昭17）
〃　村田百合子（昭22）
〃　今井　等子（昭23）
〃　北田　博朗（昭26）
会計監査　藤田　忠男（大13）
〃　中村やなぎ（〃9）（柳瀬記）
〃　山本　セツ（昭28）
〃　広瀬弘於子（昭32）

三重桜寄宿舎会（その一）

（T12）今村房

昨年六月十日第一回寄宿舎会新装なった津市の洞津会館で催した。一年前志摩の西屋寿子さんが登壇で昭和五年以前の寄宿組を集めてくださりたいとはられし、若い方も私もかっての舎監としてお招きを受けた。この一回共実に盛会、その後それに続く会をというご希望が多く、それでは今度は若者一本でということになった。若い方は結村祥子さんらで調べて驚き、老人組は浦屋さんの作成の名簿を頼りに私がお世話した。ところが当日はまことに盛会、百名近い出席で幹事も嬉しい悲鳴をあげた。東京からは吉沢支部長さんの弓塞で名近い方々が前日組と日帰り組に別れ出席くださった。また先輩竹島先生を囲み老人達はお元気な竹島先生を囲み老人達は陽あたりよき南側に、若い連中は北側に席を占め、いつ果てるともわからぬ賑やかさ。各々お得意の仕舞や謡曲、さては名取りさんの踊りまで飛び出し全く楽しい限り。次第に席も崩れ老若混合、大正五年から昭和二十四年に至る寄宿舎生活での想い出が続く。とれもとれも私達には懐かしいものばかり。午前十時から夜四時まで六時間ぶっ通しのお喋りやはしゃぎ。ほんと皆さん若返り楽しい一日だった。この会をもう一度と最近また頼まれている。当時正確な名簿なく全部にご案内状の出せなかったのが残念。次回は名簿も整え開催したいがどうかその時は各々年度のお友達を、お互に誘い合い出来るだけ多数ご出席ください。

三重桜寄宿舎会（その二）

（S15）植村祥子

昭和43年1月23日第一回の三重桜寄宿舎生の集いが津市内で開かれた。この度は名簿の不備から案内状の発送が昭和8年卒から24年までの年代に限られてしまったが反響は大で、続々と出席りが幹事に応答せられ、皆さんのご消息が多くわかった。当日は竹島、今村、伊達、中島四先生が私達を出迎えられ、世話にさった寄宿の先生としてご出席とり、皆で42人の楽しい集いとなった。昔、三重桜の誇りも高い津高女に、はるばる郡部から勉学にやって来た乙女達が寄宿舎の同じ釜の下、灯の下に本を読み起居を共にした時から随分の歳月が流れてしまったが、この日はその感慨をこめて共通の思い出が語られた。

質剛健の校風は寄宿舎にも及んで、恋愛食事が青春盛りの舎生には物足りず、外食の禁を破ってうどんやに飛びこんだ事、外出して菓子の密輸入、面会時の秘密の差入、真夜中の餅焼き、するめ焼、ゆで玉子等々、様々な方法があった。今にして思えば外食、買喰、食べ過ぎで体を害ねぬようとの舎監先生の親心からの禁であったのを、当時は考え及ばず「おいしかった。うまくやった。秘密を」と満足していたのだが、後年竹島先生がおっしゃった。「舎生のうどん屋や菓子の事、舎監はみんな知っていたんですよ」と暮れなずむ人気の無い校庭を夕食後連れだって、又は一人でそぞろ歩きして浸るロマンチックな気分これは過学生の味わえない、舎生の特権であった。毎朝の掃除、週番、こっくりさん、酌の小母さん寄宿舎の七不思議、期末試験後の解放感、一人でより、大勢で共に味わう楽しさ。帰省、やがて新学期で舎に戻り、のみの跳梁、望郷の戻、話題は次から次へと拡がり、何時までもつきない楽しい日々であった。

本年度総会のお知らせ

本年度津高同窓会総会は、左記のように行なわれることになりましたのでお知らせします。盛大な総会を願っておりますので多数ご出席下さい。

一、日　時　四十七年八月二十七日（本年は第四日曜日）十時より
一、会　場　三重県文化会館
なお三重桜部の総会はこれに先立って左記のように行われます。
一、日　時　四十七年四月二十三日（日）十時半より
一、会　場　津海岸「浜荻」
一、会　費　一、〇〇〇円

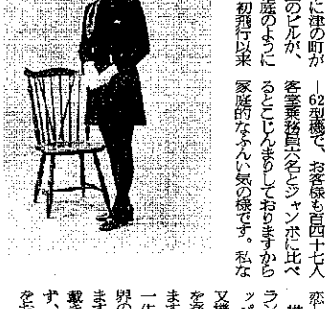
母校だより

造園工事見事に完成

四十六年四月二十二日、一号棟と二号棟との間の中庭に、池、噴水、庭石を主とする造園が完成しました。工事費四〇万円、そのうちの四八万一、〇五一円は四十三、四十四、四十五年度卒業生の方々からの醵出によるもので、その内訳は次のとおりです。

四十三年度卒業生　三三、〇〇〇円
四十四年度　〃　二六、〇〇〇円
四十五年度　〃　二三、四〇〇円
（計　四八、〇五一円）

これら卒業生の方々に厚くお礼を申し上げます。お陰さまで、この噴水の池を中心とする中庭は校内美観に一段と輝きを加え、且つまた、生徒の憩いのための最上の場所となっております。



大活躍の運動部

バスケット男子・卓球女子、ボート部県強化指定校に

三重県に四十八年にインターハイ、五十年に国体の開催が決まり本校運動クラブも意気さかんです。中でもバスケット男子、卓球女子、ボート部は県強化指定校になり長期計画のもとに遠征試合、合宿等多忙な日々を送っています。

進学希望者が大半の中ですので一・二年生中心でどうしても他校とのハンディがあり、能率的に科学的トレーニングをして少しでもカバーしようと頑張っています。県下では全般的に上位ランクされると確信しています。なお今年から硬式テニス・相撲が同好会として出発し今後の活躍が注目されています。先輩諸氏の立派な業績に負けず頑張りたいとは勿論のことどうか今後ともすべての面につきまして御支援、御指導の程よろしくお願いします。特に今年就績であった成績を列記しておきます。

○陸上競技部
別所美一（三年）インターハイ出場（県大会優勝（十五・四秒））
○剣道
団体優勝一回（県総体、東海大会予選）
○バスケット部男子
準優勝二回（県総体）（一年生大会）
○ハンドボール部男子
優勝一回（県総体、県春季選手権大会、東海大会予選）インターハイ出場
○テニス部男子
個人戦優勝（県春季選手権）（久保秀司、和田正憲（三年））
○卓球部女子
吉川敦子（三年）
全日本卓球選手権出場
吉川敦子（三年）
白井純子（二年）
インターハイダブルス出場
○硬式野球部
部以外の部もかなりの就績があった。

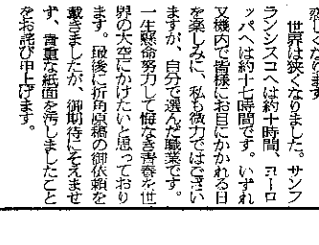
現在の私

（S44）小林美貴子

社会人となって一年目の新春を迎えました。同窓の皆様お元気でいらっしゃいますか。一昨年七月予備訓練開始、九月正式入社、訓練はテンションブリーズのテレビ放映で紹介された様に、テストテストの連続でそれは厳しいものでしたが、同期生同志で励まし合いながら晴れの日を夢みて勉強してまいりました。「日本航空第一〇七期スチューデスを命ずる」と待望の辞令を受けましたのが昨年四月でした。以来、北廻り欧州線と太平洋線、そして国内線を乗務しております。国内線は全員が一年に二万月づつ乗務する輪番制になっております。私は一度年末年始の忙しい時に当りましたため、毎日が悲鳴の連続でしたが、国内線でしか味わえないとても楽しいことがあります。それは東京より大阪或いは福岡へ向けて飛行する時、津の上空を通ることです東京離陸後二千分浜松上空の機長の飛行案内のアナウンスが聞えてくる頃私達はお客様へのお飲物の接待に大奮闘ですが、やっと一息つく頃機は伊勢路より伊勢平野にさしかかり、右真下に津の町が日本銀行の前が、百五のビルが、なつかしい津高が、箱庭のように美しく見えてきます。初飛行以来回回となく見るなつかしい光景です。早速マイクを取りお客様に「三重県津市の上空でございます。」と御案内申上げる声も思わずはずんで、いつも恩師の皆様やお友達、両親の事がなつかしく私の胸の中を去来しております。

太平洋線は御存知の様にB747ジャンボジェット機が運航しております。三百六十一名乗りのマンモスジェットで私達客室乗務員も十七名乗務致しました。中でも採用する先々務致します。常夏のハワイホノルルを経由してロサンゼルスやサンフランシスコへ飛びスコへ飛び約一週間で帰国いたします。

太平洋線は御存知の様にB747ジャンボジェット機が運航しております。三百六十一名乗りのマンモスジェットで私達客室乗務員も十七名乗務致しました。中でも採用する先々務致します。常夏のハワイホノルルを経由してロサンゼルスやサンフランシスコへ飛びスコへ飛び約一週間で帰国いたします。



また、休日には機長さんや先輩に連れられてワイキキや島めぐりに出かけたりしますが、ハワイは日本の方が多いせいか余り外国に来た実感が湧きません。それに比べて北廻りヨーロッパ線はDC－8－62型機で、お客様も百四十七名客室乗務員六名とジャンボに比べるとこじんまりしておりますから家庭的なあたたかい気の様です。私なんて世界は狭くなりました。サンフランシスコへは約十時間、ヨーロッパへは約十七時間です。いずれ又機内で皆様にお目にかかれる日を楽しみに、私も微力ではございますが、自分で選んだ職業です。一生懸命努力して悔なき青春を世界の大空にかけたいと思っております。最後に折角風船の御依頼を戴きましたが、御期待にそえませず、言葉足紙面を汚しましたことを深謝申上げます。

〒700 岡山市
現在の私
（S44）小林美貴子